ベトナムとカンボジア観光

右城　猛

1. まえがき

平成 25 年 12 月 30 日からの正月休みを利用してハロン湾、ハノイ市内、アンコール遺跡を観光してきた。

今年はアベノミクスの影響で景気回復傾向にある。11 月になって旅行会社に申し込んだのであるが、東南アジアで行くことができるのは、海外ツアー「ホリデイ」の「ハロン湾 6 時間クルーズとアンコール・ワット大満喫 6 日間」のみであった。

ハロン湾は 2008 年 5 月に家族旅行していたが、今回のように 6 時間たっぷりではないことと、アンコール遺跡を 1 度観光したいと思っていたこともあり決定した。

ベトナムとカンボジアの地図

2. ベトナム観光

2.1 ハノイ国際空港

12 月 30 日 10 時 30 分定刻に、ベトナムエアラインで中部国際空港を出発。ハノイ都心部から約 45km 北にあるハノイ国際空港(正式名はノイバイ国際空港)に到着したのは現地時間の 14 時。時差が 2 時間あるので飛行時間は 5 時間半。

ほぼ同じ時刻に関西国際空港、成田国際空港、韓国からの飛行機も到着していたが、荷物受け取りカウンターが 1 カ所であるため大混雑。空港ターミナルを出られたのは 1 時間後の 15 時。

ツアーの参加者は、関西国際空港、成田国際空港からも来ており、20 名全員が揃ってバスが出発したのは 15 時 50 分であった。

第二ターミナルの建設工事が行われていた。この工事は、ベトナム北部の経済発展に伴い、急増する航空需要に対応するため、日本の円借款を活用したもので、大成建設とベトナム国営企業で同国最大手のビナコネックス社との共同企業体による施工。工事価格は 447 億円。供用開始は 2015 年 4 月の予定。

2.2 ハノイとハロン湾間の道中の景色

ハノイからハロン湾までの距離は 150km。バスで 3.5 時間から 4 時間かかる。至る所で道路の拡張工事が行われていた。

プレキャストコンクリート製の防護壁が至るところで使用されていた。

舗装工事

コンクリートミキサーでコンクリートを練っていた。生コン工場はないのだろうか。

建設工事はまだまだ近代化の余地がある。

幅員が狭く鉄道のようであるが、ハノイとハロン間の在来線はすでに開通している。高速鉄道の計画があるのはハノイとホーチミン間である。これは何の工事だろうか。

道路沿線で見られた建築工事

壁面が煉瓦で作られた新しい家も多い。

衣類を売る店

土埃がするにも関わらず沿道に飲食店が多い。

小学校

パイナップル畑が近くにあるのか、数百メートル置きにパイナップルか売られていた。

下校時には親がバイクや自転車で子供を迎えに来る。ベトナムでは給食制度がない。昼も親が迎えに来て自宅で食事をする。昼休みは 2 時間と長い。

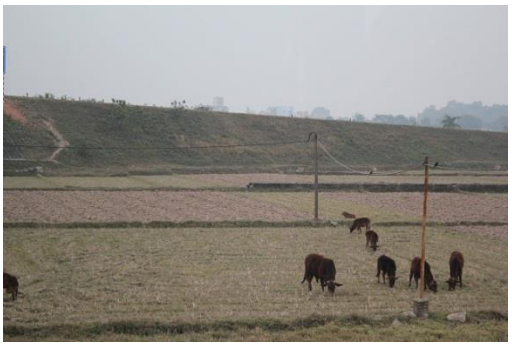
巨大な果物ジャックフルーツの路上販売

走っている自動車はどれも新しい。ベトナムでは新車しか販売されていない。新車は日本で買うより 2 倍から 3 倍する。関税が多くかけられているため。それでも保有台数が急増し、道路整備が追いつかない状態にある。

ベトナム人のサラリーマンの給料は 5 万円程度。日本の約 1/5。自動車を購入できるのは、金持ちか公務員。公務員は賄賂が多いのでそれで買える。

路上にたくさんの靴を並べて売っている店もよく見かけた。

沿道に床屋も多い。路上であれば費用がかからないため。



ハノイ郊外には水田が広がっている。以前は食料が不足していたが、今やタイに次ぐ世界第二位のコメ輸出国である。以前は、河川の氾濫時期には農業をできなかったが、堤防を整備するなど氾濫を防いだことで年中農業ができるようになり、米の二期作、三期作が可能になったためである。

所々で稲の苗代が見られたが、多くの田んぼでは二毛作の野菜栽培が行われていた。また牛が放牧されている水田もよく見かけた。

土地は国が所有しており、農民は借地して農作物を作っている。日本の場合と同じく所得は少ないようである。

高速道の入り口で見かけた標識。高速道路では自転車や歩行者の通行は許可されていないが、実際には自転車や歩行者をよく見かけた。

線路を歩く人をよく見かけた。ハノイとハロン湾間の列車は2009年4月から運行していたが、車であれば片道3.5時間のところを列車では5時間もかかるため、利用客が少なく運行を中止していた。

沿線の民家の屋根の上に電波塔をよく見かけた。ベトナムでは携帯電話が普及している。人口は約9千万人であるが、販売されている携帯電話の台数は13千万台と人口より多い。一人で2台持っている人も多い。ハノイ市内観光のガイドの魁(コイ)さんも2台持っていると話していた。

レンガ工場。個人住宅の建築にはレンガが使われている。ベトナムでは木の伐採が禁じられているため木材を使用することはできない。

路上で食事をしている光景によく出会った。ベトナムでは外食の方が安くなるため。

ハロン湾からの帰りに休憩した「ABC INTERNATIONAL JOINT VENTURE COMPANY」(国際合弁会社)。ハロン湾に行くツアーバスはここに必ず立ち寄る。

国際合弁会社の中にある国営障害者自立支援センターの刺繍工房。ベトナム戦争でアメリカ軍が使用した枯れ葉剤の影響で生まれた身体障害者が刺繍の絵を制作し、販売している。

5 年前にもここで刺繍の絵を買ったが、今回も買う。

2.3 ハロン市場

日常生活に必要なものは衣類から食料まですべて売られている。

ベトナムには沢山の熱帯果実いわゆるトロピカルフルーツがある。

一抱えもある巨大な果物は、ジャックフルーツ（ベトナム名・ミット)。

犬の肉も売られていた。牛肉は高いので普段は豚肉、アヒルの肉を食べる。猫の肉も食べる。

生きた鶏も売っていた。

2.4 ハロン湾(世界遺産)

トゥアンチャウ島に渡る道路。

トゥアンチャウ島桟橋のターミナル。バイチャイ桟橋の工事期間中の乗船は、トゥアンチャウ島の桟橋に替わっていた。工事終了後は、再びバイチャイ桟橋が乗船場所となる。

桟橋から小舟で観光用のクルーザーに渡る。小舟のときは必ずライフジャケットを着ける。

クルーズ船の屋上デッキ

ハロン湾のシンボル的存在の闘鶏岩

水墨画のように美しい景色は海の桂林と呼ばれている。

水上マーケット。生けすには、イカ、クエ、シャコ海老、ハマグリ、カブトガニなどがいた。

カブトガニは日本では絶滅危惧種 1 類で天然記念物に指定されている。それが一匹 50 ドルで売られていた。船で料理をしてくれるというので購入した。

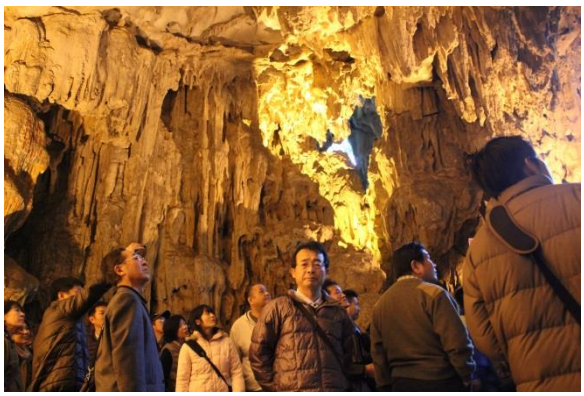
カブトガニはランチの時に料理してもらう。皿に盛っているのが料理されたカブトガニ。ピリ辛の味付けで美味しいが、2 人では食べきれずツアー客全員に召し上がってもらった。

筏の上に家が建てられた水上村。小学校もある。筏は海底にアンカーで固定されている。台風で海が荒れたときにも避難することなくここで生活をしている。

小舟で観光客に商品を売って生活をしている。

子供連れ小舟で売りに来た水上生活者

石段を登ってスンソット洞窟に向かう



洞窟面積は１万平方メートル、ハロン湾最大の洞窟、美しくライトアップされて幻想的雰囲気を楽しむ

鍾乳洞にはいろいろな動物など形に見える岩がある。ガイドが指に見えると説明してくれた岩は、元気な男のシンボルに見えた。

鍾乳洞から外に出た所にある展望台から眺めたハロン湾。ここからの展望が最も美しい。Ha Long 湾の Ha は降りる、Long は龍、つまり天から龍が舞い降りた場所で、龍がはき出した真珠がヒスイの岩となったとされる湾。大小 2000 を超える奇岩が並び、神秘的な洞窟・鍾乳洞が点在する。「海の桂林」とも呼ばれている。

スンソット洞窟から降りてきて桟橋で小舟が迎えにくるのを待つ。

桟橋の側では水上村の人が観光客用に店を出していた。

ティートップ島

ティートップ島(Ti Top Island)に上陸する。1962 年にホーチミン大統領と旧ソビエト連邦の宇宙飛行士 Ghermann Titov がこの地を初めて訪れた。それを記念してこの島は Titov 氏の名に因んで TiTop と名付けられた。島の砂浜は人工の砂浜である。

頂上の展望台までは 400 段の石段を上らなければならない。その中間付近にも展望台があるが、途中でやめると悔いを残す。金比羅さんの 1,368 段に比べるとたいしたことはないと考え頂上まで登った。

頂上の展望台に到着。所要時間は 15 分。

頂上から眺めたハロン湾。モヤがかかってかすんでいるのが残念。

2.5 ハノイ市内観光

(1) 一柱寺

ホーチミン廟の側にある一柱寺。ハノイが昇龍と呼ばれていた李王朝時代(1009～1225 年)に建てられたもの。子供に恵まれなかった宗高が蓮の花の上に子供を抱いた観音菩薩像を夢見てこの寺を建立した。現在の一柱寺は 1955 年にベトナム人が修復したもの。

ここは子宝の神様と言われているが、社業の繁栄と家族・社員の安全を祈願する。

(2)ホーチミン廟

ベトナム独立の父であるホーチミンの遺体が安置されている。金曜日以外は、中に入って遺体を拝むことができる。

廟の中に入ると、ホーチミンの遺体が安置されており、棺の四隅には 4 人の衛兵が直立不動の姿勢で警護していた。内蔵が取り出された遺体は、毎日防腐処理が施されているようである。内臓を取り出して腐食しないように毎日防腐剤を取り替えている。

ホーチミン廟の左側には、廟の建設に資金提供をした旧ソ連の国旗が、廟の右側にはベトナムの国旗が掲揚されていた。

ベトナム国旗の赤は独立運動で流した同志の血の色、星の黄色は東洋人の肌の色、星は仕・農・工・兵・商を表している。仕(し)とは知識人のこと。実際には公・商・兵・工・農。公とは公務員。賄賂をたくさん貰えるので裕福。

衛兵は1時間毎に交代する。台湾の衛兵のように観光客受けを狙った派手さはない。

(3)文廟

文廟(ぶんびょう)の 三関門。1076年にベトナムで最初の大学が開設されたところ。もともとは孔子を祀る廟堂として建てられたもので、境内には1070年に孔子を祀った廟や大学施設として使われた奎文閣などの建物がある。ベトナムでは中国と同じように科挙(高級官吏の登用試験）が行われていたが、境内の82の石碑には、15～18 世紀の間に行われた科挙試験の合格者の名前が刻まれている。

拝殿。この奥に孔子廟がある。

孔子廟の中に安置されている孔子像

ベトナム最古の国子監。左右にある細長い建物は大学の授業が行われていた講堂。正面の建物の1階には、教師の一人であったチュー・ヴァン・アンの座像の他に、今と昔の文廟・国子監の模型や、実際に国子監で使用されていた教材や筆記具などが展示されている。

優れた教師であったチュー・ヴァン・アン像。

水上劇場の人形の模型が土産用として販売されていた。

(4)ハノイの繁華街

店先に並べられた豊富な果物。

ハンガイ通りでは、シルクの衣料品など観光客用に高級品が売られていた。ルイ・ヴィトンの店も見かけた。

元旦なので国旗が掲げられていた。国旗は市役所から配られ、祝日などの節目の日には掲揚するように指導されるので、ほとんどの家で国旗が掲揚されている。

ベトナムでは、正月に日本の企業は 3 日休暇があるが、その他の企業は休まない。正月と言っても国旗を掲揚するぐらいで日本のように特別な日とは考えていないようである。

日本の正月のような祝日は旧正月(テトと呼ぶ)。テトには家族や親戚一同でお祝いをするのがベトナムのならわしになっており、帰省ラッシュで交通機関やホテルが大混雑する。

シクロに乗って市内を観光する旅行者

ホアンキエム湖の側の通り。バイクや自転車、自動車が多い。自動車はクラクションを鳴らすのでうるさい。

信号がないので横断するのが大変。止まることなくゆっくり一定の速度で渡ると、バイクが上手く避けてくれる。

赤い布は共産党の旗。祝日や党大会など特別な日には赤旗を掲揚することになっている。

2.6 食事とホテル

ハロン湾に到着したのは現地時間の 19 時 40 分。マテリン　ホテル(Mithrin Hotel)でベトナム料理のディナー。

ハノイビールを飲みながら食事。生ビールのように飲みやすい。

ベトナム名物のフォー。米で作ったうどん。なかなか美味しい。ベトナムにいるときは毎日食べていた。

宿泊したハロン・プラザホテルのロビー

ハロン・プラザホテルの前のクアルック海峡には美しい斜張橋が架かっていた。日本の ODA 特別円借款によって清水建設、三井住友建設を主体とする共同企業体による施工で、2006 年に完成したバイチャイ橋である。橋長 1,106m、最大支間長 435m、幅 25m。ベトナムでは最初の 1 面吊り PC 斜張橋。架橋当時は世界最大支間として土木学会田中賞を受賞している。

ハロン・プラザホテルを出発する朝、ロビーで女性が「北国の春」「ラブユー東京」など懐かしい歌謡曲を 36 弦琴で演奏してくれた。

ハロンでは、観光客用の高級ホテルがどんどん建設されていた。

31 日に宿泊したハノイホテル。ザンボー湖の側にある 4 つ星ホテル。

2.7 ベトナムの経済と庶民の生活

1976 年に南北ベトナムが統一し、社会主義体制の下で官僚主義的分配経済がとられていたが、1986 年のベトナム共産党大会で Doi Moi(ドイモイ)政策が決定された。Doi は「変化」、Moi は「新しい」であり、経済政策の「刷新」を意味している。

従来型のマルクス・レーニン社会主義をすて、計画経済から市場経済へ転換し、民間企業、私有財産を認め、国民のやる気を喚起することでベトナム経済の活性化を図ろうとする経済政策である。

ドイモイ政策の効果でベトナムの経済は大きく発展しているが、庶民は必ずしも国の政策に満足している訳ではないようである。儲かるのは外資系の企業だけであり、サラリーマンの月給は 4～5 万円と低く物価は高いためである。

ガソリンは 1 リットル 130 円。電気代は月 4,000 円、クーラーを使うと 8,000 円になる。自動車には高い関税がかけられているので韓国産の安物でも 300 万円はする。

ベトナムで人気の高い職業は、1 番が公務員、2 番目が医者、3 番目が警察、4 番目が軍人。公務員の人気が高いのは、賄賂が多く入るため。警察官も交通違反と言って捕まえては賄賂を要求している。軍人になるには軍の大学を卒業しなければならないが、入学試験が難しい。ある人は、150 万円の賄賂を使って大学に入学したそうである。

ベトナムでは依然として賄賂の文化が根強く残っている。庶民はこれに強い不満を持っているようである。

3. カンボジア・アンコール遺跡観光

東南アジアにあるヒンズー教国家の遺跡には、ベトナムのミーソン遺跡、ミャンマー(ビルマ)のパガン遺跡、タイのアユタヤ遺跡、そしてカンボジアのアンコール遺跡がある。人気が最も高いのがアンコール遺跡である。

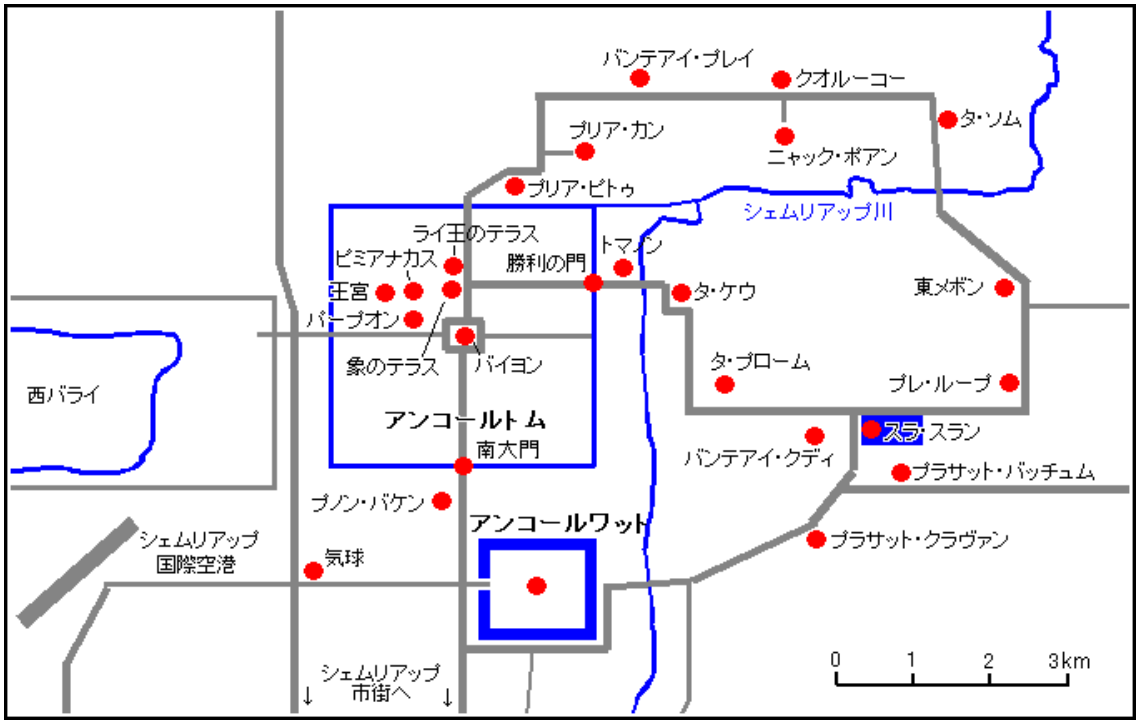
世界最大の旅行口コミサイト「トリップアドバイザー」による「観光者が選んだ人気の観光名所」で毎年 1 位に選ばれるのが、カンボジアのアンコール遺跡かチリのマチュピチュ遺跡のいずれかである。

3.1 アンコール・ワット

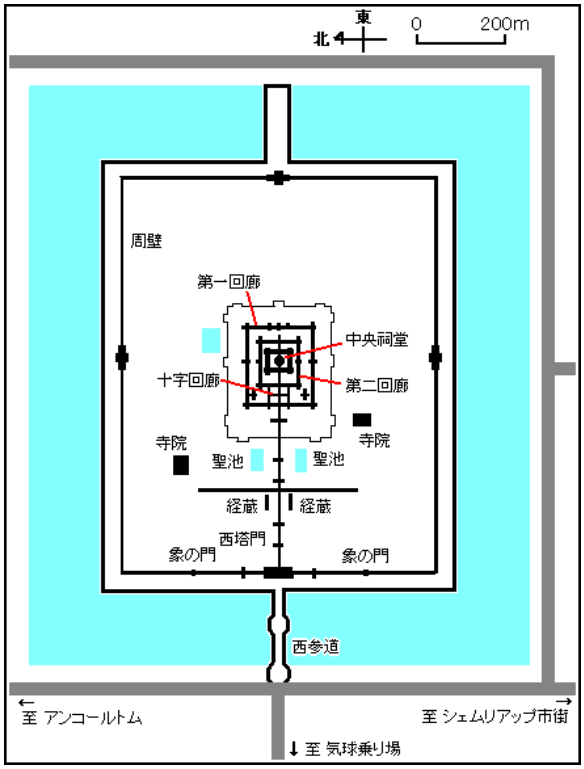
カンボジアには 9 世紀初頭から 15 世紀にかけて 600 年以上続いたアンコール王朝(クメール王朝)時代、数々のヒンドゥー教寺院が建立された。これらのアンコール遺跡を代表するのが、アンコール・ワットである。

アンコールはスクリット語で王都、ワットはクメール語で寺院を意味する。

アンコール・ワットは、ヒンズー教の 3 大神のひとりで、太陽の光照らす現象を神格化したヴィシュヌ神を祀った神殿である。



アンコール遺跡群の地図(HP「旅行のとも　ZenTech」による)



アンコール・ワットの地図(HP「旅行のとも ZenTech」による)

上空から見たアンコール・ワット(ウィキペディア)。幅 190m の外堀で囲まれている。

奥に見える建物は正門の西大門。西大門に入るため、高さ 4m、幅 12m の盛土構造の参道がある。参道には蛇神ナーガの欄干が設置されていたが、堀に落ちて残っていない。

広大な外堀はまるで大きな湖のよう。外堀の深さは 2m 程度。雷魚や鯉、ナマズなどたくさんの魚が棲んでいる。

西門

王の門の左右は 7 つの頭を持つ蛇神ナーガが護っている。

連子窓。適量の光と風が入るようになっていて見た目にも美しく機能的である。

第 1 回廊西面のヴィシュヌ神像

正面西参道の奥は、アンコール・ワット本殿

西参道の北側にある図書館。日本も修復作業に参加している。

アンコール・ワット本殿。本殿の前聖池には睡蓮が咲いていた。乾期で池の水は少なかった。

第一回廊

第一回廊の壁面の彫刻

十字回廊の中央に立つ

沐浴地。雨期には温かい雨が降り注ぐ

1633 年熊本の森本右近太夫一房が父の菩提を弔い、老婆の後生を祈るため、アンコール・ワットに仏像を奉納したときの落書きが、第 1 回廊と第 2 回廊を結ぶ中回廊の柱に残されている。

拝殿の後にある中央祠塔とそれに上る階段

中央祠塔の上から眺めた階段

背後はアンコール・ワットの本殿。

3.2 タ・プロム

タ・プロム寺院の入り口

タ・プロム寺院は「梵天の古老」の意味。シャヤヴァル 7 世が母の冥福を祈るために建立。

よう樹(スプアン)の根が遺跡に絡みつき、自然の破壊力の凄まじさがわかる。

自然の猛威を感じさせる。

3.3 バンテアイ・スレイに向かう風景

バンテアイ・スレイは、アンコール・ワットから東北へ 35km 離れた場所にある。韓国がつくったという道路を通って行く。

ガイドが、「韓国が作った道路はすぐに舗装が駄目になるが、日本が作った道路は 14 年が経つが全く異常が見られない」と説明していた。

小学生に出会った。カンボジアでは学校や先生が不足しているため、授業は午前または午後のみ。1 ヶ月毎に交代して行われている。1 クラスの生徒数は 70 名と多い。

カンボジアでは 80%が農民。田舎では兄弟が 5～10 人と多い。学校は有料であるため、貧乏で学校に通えない子供もいる。

ベトナムの牛は、日本の赤牛と同じであったが、カンボジアではほとんどが白牛であった。

やせているのであまり上手くないようだ。

トラックに積んだ木材の上に人が乗って走っていた。昔日本で見た風景を思い出した。

高床式の民家。目的は暑さ対策と雨期の氾濫対策。新しい家は、高床式にはなっていなかった。河川堤防が整備されて雨期の氾濫はなくなったのだろうか。

田舎ではまだ電気が付いていない。水は日本などが寄付して設置した共同のポンプで地下水を汲み上げて利用している。

田舎の風景を見ていると、日本の 50～60 年前のようである。

3.4 バンテアイ・スレイ

967 年に建てられたヒンズー教寺院。

シブァ神の象徴とされるリンガを模した石柱が建ち並んでいる。

リンガの奥にはヨミで女性のシンボル。

東洋のモナリザと称される女神デブァダーのレリーフ。

1923 年にここを訪れたフランスの作家アンドレ・マルローは、デヴァダー像のあまりの美しさに魅せられ、盗掘して海外に持ち出そうとして逮捕されたことから、一躍有名になった。彼の「王道」はこのときの話を小説にしたもの。

女神デブァダーの像が刻まれている祀堂

バンテアイ・スレイで遊ぶ地元の少年。

3.5 アンコール・トムの外堀でゴンドラ遊覧

アンコール・トムの南大門付近では、たくさんの観光客を運ぶトゥクトゥク(バイクトラック)とワゴン車で混雑していた。

トゥクトゥクの乗車料金はドライバーと交渉して決めることになっている。バイクに乗るのに免許は不要。

17 時 30 分よりアンコール・トムの外堀で、夕日を観ながらゴンドラ遊覧を楽しむ。

夕日がきれい

このゴンドラに乗っているのは河村親子。久し振りにのんびりした時間を過ごした。

3.6 アンコール・ワットの日の出

朝日のご来光を鑑賞するため西門に集まった日本人観光客。

日の出前の朝焼け。池の周りにヨーロッパ人などたくさんの観光客が詰めかけていた。

日の出が近づいて朝焼け終わると、日本人以外は帰って行った。

アンコール・ワットは真西に向けて建造されている。このため、春分と秋分の日にはアンコール・ワットの中央から中心塔の真上に上る。しかし正月は太陽が南に傾き、南側の森の中から現れた。

ご来光をありがたがる文化を持っているのは日本人だけである。

3.7 アンコール・トム

アンコール・トムは仏教寺院として建設されたもの。トムとは巨大を意味する。

アンコール・ワットは、東西 1km、南北 0.8km であるが、アンコール・トムは一辺が 3km ある。アンコール・トムは幅 130m の外堀に囲まれており、高さ 8m の城壁と 5 城門で構成されている。5 城門とは、西大門、北大門、南大門、そして東側にある死者の門と勝利の門の 2 つである。城内には中心寺院バイヨン、象のテラス、ライ王のテラス、バプーオン寺院、王宮跡などがある。

(1)南大門

南大門の参道の両側にはヒンズー教の天地創造神話「乳海攪拌」をモチーフとした石像がそれぞれ 54 体並んでいる。右側が悪鬼アシュラ、左側がデーバという神々。双方が抱えるようにしているのはナーガ。

南大門の入り口は狭い。大型バスは通行できない。ワゴン車がやっと通り抜けできる幅しかない。自動車と歩行者が交互に通行。

参道の右側にある悪鬼アシュラの石像

(2)バイヨン寺院

アンコール・トムの中心寺院バイヨンは 54 の塔の 4 面に観音菩薩の顔が刻まれている。四面象は正確に東西南北の方向を向いている。これは、世界に大乗仏教の慈愛を広めようとしているためである。

どの観音菩薩も笑みを浮かべている。

バイヨン寺院では，日本の資金で外回廊のシンハ像・ナーガ像の修復工事が行われていた。フランス人は手間を省くためコンクリートで修復しているが，日本人は元の石像と同じ石材を使用して丁寧に修復する。このため出来映えや耐久性に優れたものができるので日本人の評価は非常に高い。

どの顔も少しずつ異なっている。

1 ドル払うと祠堂の中に安置された仏像を拝礼させてくれた。

(3)バプーオン遺跡

3 層からなるピラミット型の寺院。かつてはバイヨン寺院よりも高かった。寺院の東側には、高さ 2m の 4 列の円柱に支えられた長さ 200m の空中参道がある。

東塔門から寺院に続く長さ 200m の空中参道。

バイヨン寺院

観光用に設置された急勾配の階段を上がる。

フランス人による補修。石材ではなくコンクリートで補修している。

(4)象のテラス・ライ王のテラス

テラスの壁には一面に象の彫刻

ライ王のテラス。塑像（そぞう）が「ライ王」と称されたのは、変色および苔が増すにつれて、ハンセン病にかかった人を連想させ、また同様に、ハンセン病を患ったアンコールの王ヤショヴァルマン 1 世のあるカンボジア伝説に当てはまったことによる。

3.8 ホリデイの森・記念植樹

東バライでの記念植樹は、地球の温暖化・カンボジアの砂漠化を防ぐためのホリデイ・オリジナルイベントである。

あらかじめ地面に穴が掘られて植樹の準備がされていた。そこに、一人ひとりカリンの苗木を植えた。

ここで絵葉書などの土産物を売る少女が植樹を手伝ってくれた。純粋素朴な少女の行動にとても好感を持てたので、10 枚セットの絵葉書を購入した。値段は 1 ドル。空港で見ると、1 枚が 5 セント。10 枚だと 5 ドル。安い買い物である。

シェムリアップ森林局発行の「記念植樹証明書」、シェムリアップ観光局長発行の「アンコール遺跡来訪証明書」をいただいた。

土が乾燥して固まっている。砕くとパサパサしている。本当に育つのだろうか。

土を埋め戻すのに土産売りの少女が手伝ってくれた。

看板には記念植樹した人の氏名が記されていた。

3.9 日本人による小学校

シェムリアップの町からアンコールに行く途中,「コックチョウこうべゆめ小学校」の看板を見かけた。神戸夢ネットが 330 万円の寄付を集めて 2005 年 4 月に竣工した生徒数 600 人の小学校である。

カンボジアには児童が多く学校が不足している。経済を安定させ貧困から脱却させるにも、平和な社会を構築するにも教育が必要であると感じた。

3.10 食　事

(1)アンコール・パレス　ホテル(1 月 1 日)

アンコールパレスホテル総料理長「ヴィン・サン」による「クメール宮廷料理」を食べる。

アンコール・パレス　ホテルはシェムリアップで最も日本人に人気がある 5 つ星ホテル。

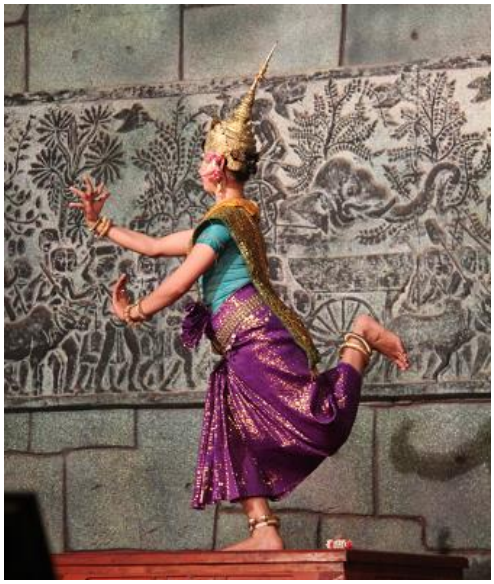
(2)アマゾン・アンコールレストラン(1 月 2 日)

カンボジアの文化遺産である伝統的舞踊を鑑賞しながら 40 種類以上のカンボジア料理が楽しめるビュッフェスタイル・ディナー。

6 人の女性が踊るクメールの踊り。

アンコール王朝時代に、儀式や宮廷の祝い事があった際に踊ったアプサラダンス。女神アプサラが天界と地上の間を漂っている姿を現し

ている。踊るとき手の形は、花の茎、葉、つぼみ、咲いた花、果実などを意味している。上の写真の右手は果実、左手は葉を表している。

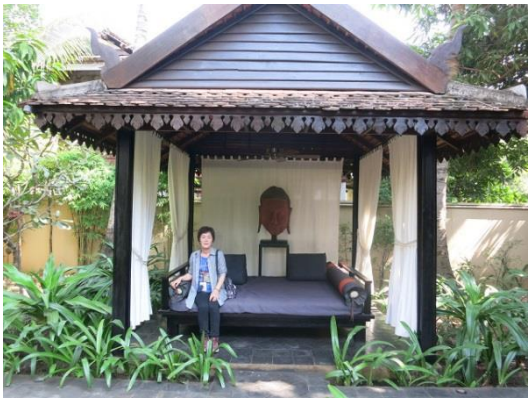


右手はつぼみ、左手は葉を表している。

最後は観客もステージに上がりダンサーと一緒に記念撮影

(3)隠れ家レストラン「フナン」(1 月 3 日)

最後の日のランチは、隠れ家レストラン「フナン」でクメール創作料理。



レストランの敷地の中の休憩所

レストランの敷地内に椰子の木があり、実をつけていた。

アンコールビールは、ハノイビールとよく似た味でとても軽くて飲みやすかった。

クメール創作料理。どれもとても美味しかった。大満足。

3.11 ホテル

シェムリアップでは2日ともホテルは、ケマラ・アンコールホテル(Khemara Angkor Hotel)。4ツ星ホテルで部屋の広さや作りは申し分ないが、問題は風呂のお湯の出が悪いこと。蛇口からチョビチョビ出るだけなので、タブになかなか溜まらない。しかもぬるま湯である。ゆっくり疲れを取ることができなかった。

正面入り口

今回の旅行で泊まったホテルはどこも日本語が話せる従業員がいなかった。そしてトイレはウオッシュレットではない。

3.12 オールドマーケット

観光客が必ず行くオールドマーケット(プサール・マーケット)。

オールドマーケットの前を流れるシェムリアップ川に架かっていた屋根付き橋。橋の中央にはベンチがあり、多くの観光客が休憩していた。

シェムリアップ川は、トレンサップ湖に注いでいる。トレンサップ湖は琵琶湖の3倍の広さを誇る巨大自然湖で、灌漑用水として利用される他、貴重な淡水魚の漁場となっている。ここには、水上にやぐらを組み居住する人々も多いようである。

橋脚はコンクリートのパイルベント方式。主桁にはH形鋼が使用されていた。

シェムリアップ川には複数の屋根付き橋が架かっていた。

オールドマーケットの前の道路を走るミキサー車を見かけた。また、タダノのトラッククレーンも見かけた。

3.13 カンボジア人の給与と物価

カンボジア人の給料は 2～3 万円で、ベトナム人の 1/2, 日本人の 1/10 である。物価は安い物もあるがガソリンは 1 リッター150 円、電気代は月 4000 円、クーラーを使うと 7000 円、1 戸建住宅の家賃は 2～3 万円、アパートの家賃は 5 千円で、日本とあまり変わらない。

シェムリアップにあるデパート「ラッキーモール」で売られていた洋服、時計、アップル社製品の値段は日本とほとんど変わらなかった。月給が 2～3 万円では、とても手が出ないだろうと思う。

ベトナム観光のガイドもそうであったが、カンボジアの観光ガイドも生活が苦しい、お金が欲しいと嘆いていた。

4. あとがき

ハノイとハロンは 5 年前に来ており、2 度目の観光であった。国民の生活には変化がほとんど見られなかったが、社会資本整備はずいぶんとすすんでいるように感じた。道路工事やホテル・住宅などの建築工事が多いように感じた。

カンボジアは予想以上に国民、特に田舎の人々の生活は貧しい。

両国とも日本人をとても尊敬し信頼していると感じた。日本は西欧諸国の植民地になることなく独立国家を貫いている。戦後、敗戦の廃墟から奇跡的経済性長を遂げ、経済大国となった。この原動力となっているのは、国民の高い道徳観と勤勉性であり、それを育んでいるのは教育である。彼らはこのような日本人を尊敬しており、お手本にしたいと考えているように思えた。

2013 年は日越外交関係樹立 40 周年に当たる。その記念に越南(=ベトナム)と日本のテレビ局の共同制作で東山紀之主演のドラマ「The Partner　愛しき百年の友へ」が昨年の 9 月に放送されている。ベトナム独立運動の指導者ファン・ボイ・チャウを支援した日本人商社マン鈴木哲也と医師浅羽佐喜太郎の友情を元にした番組である。

また、ベトナム独立の立役者クオン・デの経済的スポンサーとして協力した日本人実業家松下光広の関係を描いた実録小説「安南王国の夢ベトナム独立を支援した日本人」(牧久 著)が出版されている。

今回の観光旅行によってベトナムとカンボジアにこれまで以上に興味と親しみを感じるようになった。

帰国の際にハノイ国際空港で乗り継ぎのため 2 時間の待ち時間があった。出発ゲートの前の椅子で休憩していたとき、全く偶然に松山の金村毅先生、紀子先生ご夫妻にお会いした。先生達は松山空港からのチャーター便でハノイとハロン湾観光に来てその帰りであった。本当に奇遇である。

【2014 年 1 月 9 日記】